

評価 A: 目標を上回った B: ほぼ目標どおりできた C: 目標を下回った

学校教育目標	重点目標 (中・長期目標)	総合評価		評価
保育及び介護福祉に関する専門的技術と知識を修得し、しあわせを創造する力を養うフィールドとして、愛情豊かな心を育み、誰からも愛される福祉人材を育成する。	創造力に富み、誰からも愛される人材、地域を愛し地域に貢献する人材、主体的に学び行動できる人材を育成する。	学生が社会を構成する一員として、様々な課題に対して、主体的に取り組む姿勢を醸成し、地域とのつながりを意識し、持続可能な地域づくりに貢献する人材の育成に努めた。福祉大保育園が県直営の保育実習室から民間運営の認可保育所となり、今まで以上に連携を強化することで、学生の実践学習の質を確保した。童謡唱歌や発達障がい等に関する専門性ある講義や防災に関する講演について地域公開講座を実施とし学びの共有をした。また、地域貢献活動として、学生会による環境美化活動や、文化祭・卒業記念音楽会の開催、ボランティア活動への積極的な参加を促進した。さらに、能登半島地震の被災地支援としてチャリティー公演を開催し、地域との連携を強化した。社会課題への理解を深めるため、保育学科では社会学の授業に地域施設訪問を導入し、介護福祉学科では認知症や発達障害の啓発グッズを制作・配布して地域への発信に努めた。また、副知事や健康福祉部長との意見交換を行い、少子高齢化問題について議論を深めた。この他、体験活動(カヤック体験や美術館鑑賞)により、地域の文化や歴史に触れ感性を養い、学生一人ひとりが豊かな心を育てる一助とした。今後は、地域の学習拠点をさらに広げ、実践的な学びの機会を増やすことが大切である。		B
	今年度の重点目標	成果(○)と課題(●)	改善策	評価
	実践力を重視した専門教育で、しあわせを創造する最前線で活躍する人材を育成する。	○今年度、福祉大保育園が民間運営の認可保育所となり、学校と保育園の職員との定期的なミーティングや情報共有を行い、実践学習の質を担保した。また、学生が保育計画の立案・実施・評価を行い、保育の実践力を高めた。そして運動会やクリスマス会の演習を通じ、主体性を持って子どもと関わる経験を積んだ。さらに、保育環境や食育など多角的な視点から探求し、実際の現場と学びを結びつけた。 ○特別講義では、童謡唱歌や防災に関する講演を実施し、地域住民も参加した。また、発達障がいや回想法等に関する講義を継続し専門的知識の学びを深めた。 ○保育学科は豊岡短期大学通信教育部と提携し、幼稚園教諭の免許を取得した。また介護福祉学科は、国家試験対策を強化し、高い合格率を維持している。今後も専門性を高める学びを推進していく。 ●民間運営となったことにより、保育園における学生指導に携わる職員が入れ替わったことや園の職員数が3倍に増加したことに伴い、これまで以上に学生と保育園職員との連携や、綿密な情報共有が必要である。	・保育園職員や介護施設職員との情報共有の仕組みをさらに充実させ、実践学習の質を向上させる。	A
	信州の豊かな自然・歴史・伝統を愛し誇りを持ち、社会福祉を通じて、持続可能な地域づくりに貢献する人材を育成する。	○保育学科は北澤美術館や諏訪湖でのカヤック体験、介護福祉学科は原田泰治美術館を訪れ、地元文化の理解を深めた。また、季節の飾りや「ひな祭り」の講義・演習を通じて、日本の伝統文化を学ぶ機会を提供した。 ○環境美化活動として、学生会が花を植え、自然と向き合う機会を創出した。文化祭や卒業記念音楽会では、学びの成果を地域に発信し、地域住民との交流を深めた。ボランティア活動では、子ども食堂や地域活動に積極的に取り組み、また、世界自閉症啓発デー等に参加し、地域への啓発活動を行った。 ○能登半島地震の被災地支援のためのチャリティー公演を開催し、地域課題への理解を深めた。体育館が地域の避難所として指定されるなど、防災の観点でも地域と連携している。これらの活動を通じ、学生は社会福祉の実践を学び、地域貢献の意識を高める機会となった。	・引き続き、学生が学びを実践し、地域住民と交流できる場を増やす。	B
	みんなのしあわせのために、自らとるべき行動を学び、考える力を養い、目標に向かって行動できる人材を育成する。	○保育学科1年生は今年度から社会学の授業に地域の施設訪問を導入し、地域課題を学び、社会貢献の意義を考える機会を得た。また、介護福祉学科の学生はオリジナル回想カルタを施設や地域住民に配布し回想法を促進する活動や、世界アルツハイマーデーや世界自閉症啓発デーに向けて、手作りマスコットを制作・配布し、認知症や発達障がいの啓発をした。 ○地域との連携も強化し、地域主催のまちあるき企画では、ノベルティグッズの制作に協力し、地域活性化に貢献した。 ○副知事や健康福祉部長との意見交換を実施し、少子高齢化問題について議論を深めた。 ●学生は地域貢献や福祉に関する学びを深めたが、自らがニュースや現場の情報を得る機会が少ないため、課題の全体像を把握する機会が少ない点が課題として挙げられる。今後は、地域の学習拠点を広げ、実践的な学びの機会を増やすことが求められる。また、公務員試験の傾向が変化しているため、試験対策の内容を毎年検討する必要がある。	・学内だけでなく地域を学習拠点とし、実地体験を増やし、学習の実践機会の拡大していく	B
	本校の魅力を発信し、誰からも愛される福祉人材を育成し、志の高い学生を確保する。	○チラシの改訂により、保育学科卒業後に介護福祉学科へ進学し、トリプルライセンスを取得できることを明確に伝え、本校の強みを打ち出した。また、パンフレットを大幅にリニューアルや、ホームページやインスタグラムを活用することで、より多くの人に本校の魅力を発信した。 ○オープンキャンパスや文化祭、卒業記念音楽会などのイベントを通じて高校生に本校の特色を直接伝えたほか、学校訪問を実施し、個別相談の機会を設けることで本校の特長を広く伝え、受験しやすい環境を整えた。加えて、受験機会を複数回設定し、志願者の負担を軽減する工夫も行った。 ●保育学科では一般選抜終了時点で合格者は38名にとどまり、定員(50名)を大きく下回る状況となっている。今後、受験者数減少の要因を分析し、高校生の進路動向を把握した上で、効果的な施策を検討する必要がある。	・受験者数減少の要因を分析し、本校の魅力をより効果的に発信していく。	C

評価 A: 目標を上回った B: ほぼ目標どおりできた C: 目標を下回った

領域	対象	評価項目	評価の観点	成果(○)と課題(●)	改善策	評価
教育活動	教授	実践力を重視した専門教育で、しあわせを創造する最前線で活躍する人材を育成する。	福祉大保育園と連携し、保育現場のスキルの定着に努め、実践力に繋がる学習となったか。	○福祉大保育園は、今年度から民間企業が運営する認可保育所となったことに伴い、保育園職員と定期的なミーティング、日々の情報共有、学生指導の引継ぎ等、実践学習の質の担保に努めた。 ●民間運営となったことにより、保育園における学生指導に携わる職員が入れ替わったことや園の職員数が3倍に増加したことに伴い、これまで以上に学生と保育園職員との連携や、綿密な情報共有が必要である ○教科目「保育実践演習」では、昨年に引き続き、保育テーマの設定、それに基づくねらいや活動内容を学生同士で考え、保育計画の作成、実施、評価をした。保育学科2年生については、演習開始時期が年度当初であり、見慣れない保育園職員に戸惑いの姿も見られたため、園職員との打合せにはできる限り付き添い、園職員からの助言をどのように受け止め、理解し、保育計画に反映させるのか等について個別指導をし、精神的負担の軽減に努めた。保育の実施については、周辺の草花を事前に調査し、保育に取り入れることや、大豆と豆腐の感触の違いや、出汁の材料の感触、香りの比較など、園児と一緒に体験的な学習ができ、園児の意欲的な反応から、子どもの主体性を引き出す保育について、実践的な学びができた。保育学科1年生については、子どもに慣れることから始め、実際の保育場面からどのように情報を収集し、記録を残すのか、実践を交えながら実習前に貴重な学習体験ができた。また、初めての保育実践から、学生にとっては新鮮な子どもの姿が多く、保育士として配慮すべき具体的な事項について体験的に学び得ることができた。 ○教科目「保育原理Ⅱ」では、運動会、発表会、クリスマス会の3本立ての演習とし、他者に遠慮することなく、自分の強みを存分に発揮するよう指導した。学生の主体性を重視した役割分担とすることで、自ら考え、動き出す学生が多かった。運動会、発表会演習では、組体操や劇などを一緒に創り上げていく中で、園児個々に応じた言葉掛けや対応に悩み、自ら考え、創意工夫する姿が見られた。発表後には、園児の成長を間近に感じた感動や、達成感を園児と共に感じる事ができた。最後のクリスマス会演習では、これまでの経験が活かされており、園児の姿やその場に応じた臨機応変な対応を、自ら感じ、動き出し、工夫する学生の姿がみられた。3つの演習を通して、日常に彩を加える行事の大切さや、在り方について考える良い経験ができ、実践力を身につける一助となった。 ○教科目「保育総合演習」では、保育環境や、食育、リズム遊び、ケース研究など、実際の子ども姿と机上の学びとの結びつきを考え、多岐に渡った探求をすることができた。実際の保育現場を研究の場とすることで、生の子どもの声を聞き、保育現場職員の考え方に触れることができ、学生は意欲的かつ主体的に学習に取り組むことができた。学生一人ひとりの探求したい分野で学びを深めることで、就職後、実践に活かせる研究となった。	・引き続き、定期的なミーティングに加え、日々の情報共有を綿密に実施する。学生とも個別の対話を重視し、効果的かつ円滑な学習ができるよう支援する。	A
			保育・介護現場が抱えている現在の課題に対応する学習の機会を提供したか。	○特別講義・公開講座として、おかや音楽協会の佐原玲子氏が「童謡唱歌の魅力について」と題して、講演(5月2日)をした。保育・介護、保育園児・地域ら約100人が、保育士・介護の現場で歌う機会の多い童謡・唱歌を歌いながら、発声の仕方や表情の大切さ、また子どもから高齢者まで受け継がれる童謡唱歌の楽しさを学んだ。 ○特別講義・公開講座として、県みらい基金の高橋潤氏が「災害が起きる前にできること考える」と題して講演(5月13日)をした。学生、職員、地域住民ら約70人が参加し、災害に関する身近な取り組みを知って、住民同士のつながりの大切さや災害時の心構えを学び、自分たちのできることを考えた。 ○保育・介護で課題である発達障害の特別講義を毎年実施し3年が経過した。今年度も、発達障害視覚的支援アドバイザーエンジェル氏による講義を、全学年の学生が受講した。各学年に応じて取り組み内容とし、介護福祉学科は3回目の受講となるため、実習やボランティア経験からの質問等に答える形式とし、より具体的な実践方法を学んだ。学生は発達障害の正しい理解と支援方法について学ぶとともに、地域の方の熱心に学ぶ姿に刺激を受け、学習意欲の向上に繋がった。 ○介護福祉学科は、長野県社会福祉協議会主催のケアコンテストに3年連続で参加し、知事賞をはじめ複数の賞を受賞した。学生は意欲的に取り組み、考える力やスキルの向上に寄与するとともに、介護に対する志を高くした。 ○介護福祉学科は、保育園児を交えて、車椅子ギタリスト川崎昭仁氏による講話(6月23日)やアニメソングなどのコンサートを開催した。川崎氏は、「障がいがあっても人としてあたりまえのことが平等にできる共生社会」の思いを伝えた。これにより、未来の介護人材の種まきと学生が担う役割として「生活を支える」だけでなく、「生きがいやできることを共に見つける」ことの重要性を考えるきっかけとなった。 ○介護福祉学科学生がオリジナル回想カルタを作成し、地域の方と回想法の実践や認知症カフェにて、カルタを楽しんだ。さらに介護実習で回想カルタの実践をすることで、回想法の意義や回想法を効果的に活用するスキルを習得した。また地域とのつながりや、実習で実践することで、理論と体験の結びつきを実感できた。 ○回想法カルタ実践は新聞や長野朝日放送にて報道され、より多くの方が本校を知る機会となった。 ●保育や介護の今抱えている課題について、学生が正しく理解し、専門性を高める必要がある。また、なるべく広い視野で地域も含めた福祉の啓発をし、地域と一緒に学び、探求する姿勢をもつことが大切である。そして学生が、専門性を高めることが、よい社会づくりにつながるという視点を学ぶ必要がある。 ●福祉施設における諸課題を解決できる能力を養い、地域における福祉のリーダーとして活躍できる人材を養成していく必要がある。	・特別講義・公開講座を継続して開催する。学生がより実践的に学び、地域と連携しながら、福祉の専門性を高める。また、より多くの方に学びの共有の場を提供していく。 ・時代に沿いながら、諸課題を解決できる教育を行うため、適宜授業カリキュラムを見直していく。	A

			幼稚園免許取得に向けて、希望者全員が免許を取得したか。	○昨年度から豊岡短期大学通信教育部と提携。保育学科2年生は希望者 39 名全員が免許を取得。 ●1年生は、当初 39 名が希望していたが、休学者を含めて7名が途中で断念、現在 32 名が併修している。 ●経済的事情、学力、進路変更等の理由で断念する学生がおり、取得に対するモチベーションの維持が課題である。	・学習に対するフォロー、進路経済状況などの確認が更に必要である。 ・入学前に取得スケジュールや経費、課題など併修することへの判断材料を極力丁寧に説明していく。	B
			万全な介護福祉士国家試験対策により、学生全員が国家試験に合格したか。	○国家試験対策模試、個別対応を実施し、全員(17名)が合格の見込み(自己採点の結果)合格発表は令和7年3月24日(金) ○国家試験受験資格化(平成 29 年度)以降、本校の合格率は 100%である	・引き続き学生全員が国家試験に合格し、資格取得できるよう個々のスキルに合わせて指導する	A
		信州の豊かな自然・歴史・伝統を愛し誇りを持ち、社会福祉を通じて、持続可能な地域づくりに貢献する人材を育成する。	体験活動等により、豊かな感性を養う広い視野から社会と自分の行動を学び得る機会の提供に努めたか。	○支援する会と同窓会の支援により、保育学科1年生は北澤美術館、2年生は諏訪湖でカヤック体験をした。介護福祉学科は原田泰治美術館に行った。学生は、地元ゆかりのある美術、工芸作品の魅力を探求・再発見することにつながった。またカヤック体験は、風や水等を五感で感じ、地域の文化を体感し、感性が磨く機会となった。 ○1階のホール中心に季節の飾りとして、5月は五月人形とこいのぼり、7月は七夕飾り、2月はおひな様飾りをし、季節の行事や文化を学ぶ機会となった。 ○「ひな祭り」に合わせて、同窓会によるおひな様の由来や込められた願い、「ひなまつり」の歌詞に込めた意味の講義を行い、季節の行事について深く学ぶ機会とした。また、保育園児と一緒に飾ることで、園行事として季節行事の活用について学ぶ演習にもなった。 ○玄関ホール(ケヤキの木の周囲)に、学生会が7月にパンジーやビオラを中心に 150 株の花を植えた。環境美化の目的だけでなく、学生の成長や自然の変化に気づく機会が増え、感性を養う一助となった。 ●今年度は空調工事の関係でコミュニティホールでの飾りが制限されたが、季節や行事に係わる理解を深め、制作や表現のスキル等を学ぶ機会を確保していく。	・体験は、自ら考え学ぶ力の基礎となるため、感性を養う体験を積極的に取り入れる。	B
			地域、社会の一員として行動する重要性を考える機会を提供したか。	○文化祭では、普段の学習の学びとして、介護福祉学科はアロママッサージやオリジナル回想カルタの展示、保育学科では保育施設での学びの紹介を模造紙にまとめ展示した。学生は学びの成果を保護者や地域の方々に発信し、学習意欲が高まった。 ○卒業記念音楽会は、地域住民、卒業生、高校生等の約 500 名の方が来場した。長野放送「土曜はこれだね」で学生の練習風景等を取材し、放映された。テレビによる放映は、学生のやる気向上だけでなく、学校やイベントの認知度アップ、地域との結びつき強化にもつながる貴重な機会となった。 ○学生個々のボランティア活動として、諏訪市で行われている子ども食堂に継続的に参加することや諏訪地域の一地区で行われている活動に参加することで地域の活動に貢献することができた。本校へは多くのボランティア依頼がある。それらの依頼には学生に広く周知し可能な限り参加した。参加した学生はボランティアから学ぶことも多く、様々な社会活動を経験することができた。 ○福祉クラブとして、手話クラブ(月 1 回聴覚障がい当事者の講師による手話の勉強会)、夢ポッケクラブ(知的障がい児との交流会)が活動し、スキルの向上や障がい児・者への理解が深められた。 ●多くの学生にとってはボランティアに対する関心は必ずしも高くない。保育学科1年生には回数を決めてボランティア活動への参加を促しているが、継続して参加する意欲を高める必要がある ○能登半島地震の被災地を支援するチェリティー公演【清水町(1～4区)主催】を本校で開催(5月 25 日)した。学生、市内外から約 200 人が来場し、アマチュア劇団「音光舞」による舞台「さくら」を観劇した。学生は募金箱を作り募金活動や劇団の照明係として公演を盛り上げた。これにより、学生は地域の抱えている課題を具体的に知り、支援の必要性を考えるきっかけとなった。また地域の人や仲間と協力しながら、自分たちの行動が地域社会にどのように貢献できるかを実感できた。そして、学生は単なる知識だけでなく、実践的なスキルを身につける機会となった。 ○R5年度から地域の避難所として、本校体育館が指定された。本年度は悪天候により防災訓練は中止となった。	・保育学科の「地域実践演習」の授業を通じて、ボランティアの役割や地域で社会活動をする重要性について学習を深める。	B
	課外指導	みんなのしあわせのために、自らとるべき行動を学び、考える力を養い、目標に向かって行動できる人材を育成する。	社会を構成する一員として、社会課題を意識し、主体的な行動に繋がる指導をしたか。	○保育学科 1 年生は、今年度から社会学の授業に地域施設訪問を導入した。学生 37 人が地域を拠点に活動する団体や施設、取り組みを見て学ぶフィールドワーク(野外研究)を行い、諏訪市内の3施設を訪問し、社会のために何ができるか考えた。学生は地域課題を実地で学ぶ体験をし、自ら行動することの意義を考える機会となった。 ○介護福祉学科学生が作成したオリジナル回想カルタを介護実習施設や地域の方に配布した。地域の方から「昔を思い出し楽しかった」という感想をもらい、地域の方への回想にもつながった。また世界アルツハイマーデイ(9月)に向けて、ロバ隊長マスコットを 500 個作り、公開講座、諏訪広域フェスタ、社会福祉協議会を通じて配布し啓発に努めた。認知症を正しく理解し、多くの方に認知症について知ってもらう機会となった。 ○県が策定する少子化・人口減少対策戦略に地域の声を反映させるため、7月 11 日、副知事、健康福祉部長と学生6人との意見交換を本校で行なった。県人口や労働人口が減り、少子高齢化が一層進展する 2025 年を見据え、学生らは若者の目線から取り組むべき課題を副知事らに訴えた。学生は少子高齢化について深く考え、自分たちの視点で課題を捉え直すこと、意見交換を通じて、県の考え方を理解し、自分の意見を整理し、論理的に伝える力や現実的な	・地域での実践・発信・振り返り・キャリア教育を組み合わせることで、学生が「学びが社会に役立つことを実感し、誰かのために行動する意義を深く考える」機会を増やしていく。	A

				提案をするスキルを磨く場となった。 ○地域主催のまちあるき企画にて、ノベルティグッズ作成(コースターに刻印をする)に協力した。学生は地域の活性化に自分たちが貢献していることへの実感を得る機会となった。 ○保育学科2年生、介護福祉学科学生に対し、人権擁護教室(発達障がい)を開催した。ロールプレイにより、学生は発達障がいのある子どもの気持ちや関わりの必要性を考え、人権感覚を磨いた。 ○来年度就職予定の学生に対し、1月に社会人研修を実施し、社会人として必要な学生自身の特性を分析し、スキルや自己コントロールの方法、また整理整頓の大切さについて学んだ。研修後のアンケートから、就職先で役立てたいという回答が全体の3/4であり、学生は、自分の置かれている立場を理解した。 ○今年度で4年目となる世界自閉症啓発デー(4月)に参加した。シンボルカラーである「青」を取り入れたマスコットを作成し、地域の方に配布した。学生は諏訪市のライトアップ除幕式(市役所)に参加し、自閉症、発達障害の啓発に努めた。 ●今年度から社会学の中に地域施設訪問を取り入れことで、学生は地域課題を実地で学ぶ体験をし、自ら行動することの意義を考える機会となった。自分の学びが社会の役に立つことを実感し、「誰かのために行動する意義」を深く考えることは大切なため、学内だけの学習ではなく、地域に学習拠点を広げていく必要がある。		
			自ら社会課題の解決につながるようなアクションがみられたか	○未来の福祉のファン獲得に向けて、県社会福祉協議会と協力し、11月23日「ふくしニア(福祉のお仕事体験フェア)」を行なった。体験は車椅子や手話、健康チェック、赤ちゃんの着せ替え、絵本の読み聞かせなど10種類について、保育園児から高校生までの幅広い来場者が主体となって体験し、福祉の魅力を伝えた。来場者から「将来の参考になった。福祉の仕事に興味を持った」との意見が聞かれた。 ○ボランティアとして、子ども食堂、絵本の読み聞かせ、障がい児・者等の活動、諏訪湖の美化等を通して、積極的に地域(住民、高校生、施設関係者等)と交流し、ボランティアの意義を学び、地域の一員であることを実感した。 ○手話クラブはR4年度から、諏訪市社会福祉協議会の協力により、1～2回/1ヶ月、聴覚障がい当事者の講師による手話を学んでいる。聴覚障がい当事者と交流し、障がいに対する理解を深め、手話スキルが向上した。 ●学生は、福祉や保育・介護の現場でどのような問題が起きているのか、自らがニュースや現場の情報を得る機会が少ないため、課題の全体像が見えていない傾向がある。	・授業で、ニュースや現場の情報(ニュース、専門誌等)を取り入れ、自分の興味以外のことにも関心が向くようにしていく。 ・関係する機会や機関等と積極的に連携し、社会課題に対して、主体的に行動することを学ぶ機会を提供する。	B
			適切な支援により、個々の学生に適した就職に繋がったか。	○保育学科 1 年生に新たに「キャリア形成」の授業を導入し、1 年をかけて就職への意識付けを行った。その中で長野県社会福祉協議会に協力を依頼し、県内の8市の保育士採用担当者から、就職活動に対する現状や求める保育士像の説明を受け、就職意欲の向上に努めることができた。 ○キャリアデザインセミナーとして、教養対策講座と面接対策講座を実施した。教養対策講座は、公務員教養試験対策として、4月から7月にかけて合計 25 回実施した。 ○保育実技の試験を控える学生については、福祉大保育園で実際の試験場面を想定した対策を重ねた。実際の保育現場で試験対策を実施することで、試験当日は予想される子どもの姿を具体的にイメージすることができ、緊張を和らげ、自分らしさを発揮することができたと予想される。実技試験の合格率は100%となり、希望する進路へ進む一助となった。 ○学生一人ひとりに対して、担当教員を配置し、個別に進路について助言を重ねた。さらに教員間で情報を共有することで、学生への情報提供やアドバイスの厚みが増すように工夫した。また、適宜、に外部機関(ハローワーク、社会福祉協議会、マイナビ、ジョブカフェ等)と連携し、全員が希望する福祉現場等への就職が内定した。 ●公務員(市町村等)試験は、一次試験で教養試験がある。例年公務員試験が早まり試験内容の傾向が変わってきている。そのため、毎年教養試験内容や対策の時期や内容を検討する必要がある。	・公務員試験の時期や出題傾向を分析し、教養対策の講師と時期を含めた内容を調整していく。 ・引き続き、丁寧に個別に対応していく。	B
学校運営	学生募集	志の高い学生の応募に繋げるため、本校の魅力を発信し、誰からも愛される福祉人材を育成する。	本校の魅力を明快かつ適切に発信し、志の高い学生の応募に繋がったか。	○チラシの改訂により、保育学科卒業後に介護福祉学科へ進学でき、トリプルライセンスを目指せるという本校の魅力を端的に伝えることができた。 パンフレットを大幅にリニューアルした他、ホームページ・Instagramの活用、また本校イベント(オープンキャンパス、文化祭、卒業記念音楽会等)による高校生等への啓発、加えて学校訪問により本校の魅力を伝えた。また、本校を希望する生徒等が受験しやすいように、複数回の受験機会の設定やオープンキャンパスでの個別相談など、受験しやすい環境に努めた。 ●一般選抜終了時点で 38 名の合格者が決定しているが、40 名を割り込む状況となっている。受験人数の減少の理由についての分析が必要である。 ●少子化による受験者数減少や四年制大学等への進学増加傾向など高校生の進路動向について把握し、できる施策は何かを見極めていく。	・受験者数減少の要因を分析し、本校の魅力をより効果的に発信していく。	C
	教育施設の適正な運営	災害・感染症のリスクを最小限にし、様々な教授を行う。	災害・感染症防止対策の徹底により、リスクを下げ、効果的に授業を実施できたか。	○感染症(コロナウイルス、インフルエンザ、溶連菌感染症、ノロウイルスなど)に対し、オンライン授業と対面授業との併用が滞りなくできるよう体制を整えることができた。 ○オンライン授業は、感染症罹患者だけでなく、災害(電車が止まる等)による通学困難者に対しても対応できた。これにより、学生は学校以外に、自宅、アパート等で学びの継続ができた。 ○感染症発症時は、基本的な対策を徹底し、集団発生はなく、感染を最小限で抑えた。 ○以上により、学生全員が必要な単位を取得し、卒業及び進級となった。 ●今後も、コロナやインフルエンザ等の感染症、また災害等により、オンライン授業の併用は必須となる。オンラインを活用した学びの保証には、ネット環境(Wi-Fi 環境やパソコン等の機器等)が必要となるが、オンライン環境が不十分な学生等がいる。	・引き続き、感染対策に取り組みながら、オンラインも併用した学習等で、教育効果を高めていく。 ・Wi-Fi 等のオンライン環境の拡大を進めていくほか、学生の学習環境や職員の適切な職場環境を整えるため、教務システムの導入に	B

					ついて引き続き要望していく。	
		教育施設の適正な管理をする。	快適かつ安全に学べる環境の維持に取り組んだか。	○今年度、空調機器の工事を実施している。（R7. 6に完了予定。） ○設備点検で指摘等を受けていた防煙垂れ壁や誘導灯の修繕を実施し学校生活を安全に送れる環境の確保に努めた。 ○樹木の剪定や伐採を行い、快適に学べる環境の確保に努めた。 ●更新時期を迎えている設備を順次更新するよう計画をしているが、突発的な故障や不具合も多く発生している。優先順位を見極め、計画を変更しながら予算の範囲で対応するよう努める。	・必要な予算の確保に努め、引き続き、必要な対策を講じていく。 R7年は、照明のLED化工事を実施予定。	B
	その他	コンプライアンスを遵守できたか。	教職員や関係者が、学校及び自分のミッションを理解し、目標達成に向けて、取り組んだか。	○授業から学校運営に至るまで法令を遵守し実施している。	・引き続き、コンプライアンスを重視しながら教育活動及び学校運営に取り組む。	B